

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 50

かみさわ さはりのわん ほうおうじはいじ
上沢遺跡の佐波理鏡と房王寺廃寺

寺岡 洋



はじめに

西摂（阪神間）の古代寺院を
『むくげ通信』278号から取り上げている。① 猪名寺
廃寺（尼崎市）、② 伊丹廃寺（伊丹市）、③ 芦屋廃寺（芦
屋市）、西摂ではないが摂津の四天王寺（大阪市）と続き、
今回は房王寺廃寺（神戸市）になる。

上沢遺跡 — 新羅製・佐波理鏡（銅鏡）の出土 —

古代寺院の紹介がこのシリーズの主題であるが、今回は房王寺廃寺（室内遺跡）を脇役にし、新羅との交流に注目したい。房王寺廃寺と接する上沢遺跡から稀有な佐波理鏡（上図）が出土していることによる。佐波理鏡を入手できるような特別な行事があったのではないか？

上沢遺跡はJR神戸線・兵庫駅から北へ約1km、市営地下鉄・上沢駅周辺になる。北側には市立神港高校、会下山（えげやま）公園が広がる。大輪田泊も近い。

六甲山系南麓の会下山丘陵から派生する微高地に立地する大規模な複合遺跡で、山手幹線道の拡幅工事や地震復旧の住宅建築等に伴い発掘調査が多く行われた。

佐波理の鏡が出土した調査は、区画整理に伴う防災公園予定地で、南半分が28次、北半分が33次調査。

上沢遺跡の古墳時代 一打ち欠かれた韓式系土器—

上沢遺跡は弥生時代からの遺跡が重なる複合遺跡であるが、早い時期の渡来系集団の居住が確認できる。

27次調査〔神戸市2001〕では、豎穴住居に造られた竈（かまと）から、「在地の土器と共に、打ち欠かれた2個体以上の韓式土器の甕（かめ）」が出土した。

竈の祭祀を行う渡来人の痕跡である。時期は布留期（およそ4世紀ころ）とされ、その年代であれば西摂では最古級の造り付け竈になる。西方の竈藻川（新湊川）流域には、神楽遺跡（長田区神楽町）という大規模な渡来系集団と関連する遺跡も知られる。

井戸→



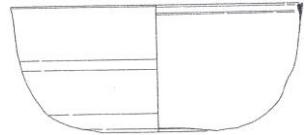
上沢遺跡第28次調査

ここでも韓式系土器が出
土している。奈良時代の掘
立柱建物は銅鏡が出土した
井戸に付随する建物で、柱
穴から銅を溶かした炉壁片が出土しており、銅製品の工
房が存在したようである。土坑の埋土から、奈良時代の
平瓦が2個体出土している。第16次調査〔神戸市2000〕でも包含層掘削時に重圈文軒丸瓦が1点出土してお
り、周辺に瓦葺建物が想定されている。南接する第4次

調査地では官人の着用する銅製帶金具（巡方 じゅんぽう）
が出土した。

第33次調査

小さな公園の真ん中あ
たりになる地点で、奈良
時代の大型の井戸が調査さ



れた。井戸枠は井籠（せいろう）組みで、使用する材（檜）
を選んでおり、平城京などで見られる丁寧な作りである。
深さ3.9m。井戸の底から完形の銅鏡が1点出土した。
口径14.5cm、深さ6.3cm。銅鏡の上には石が置かれ
ており、聖なる井戸への祀りに使われたようである。



佐波理の鏡 佐波理鏡は
正倉院のものが有名で、「佐
波理加盤（かさね鏡）」と呼
ばれ、包装に新羅文書の反
故紙が使われているもののが
あり、新羅製であることが

正倉院の佐波理鏡

一目瞭然。新羅の村落文書は正倉院以外に存在せず、貴
重な反故紙である。加盤（かさね鏡）というのは、鏡が
入れ子式に重なっているもので、新羅舶載品の購入申請
書である「貿新羅物解（はいしらぎぶつけ）」には「五重鏡
大」などと表記されている。五重は五口一組。

正倉院佐波理鏡の平均的な成分は、銅80%前後、錫
20%前後、若干の鉛と砒素からなる。金色の地金色を
呈し、口口挽きで極めて薄く仕上げ、飲食具や供養具
に用いられた。上沢遺跡の銅鏡の成分は銅80%、錫1
4%、鉛3~5%とほぼ一致する〔菱田2016〕。

発掘調査で完形の佐波理鏡が出土するのは稀有な例に
なる。奈良文化財研究所が成分分析した藤原宮・京、平
城宮・京出土の佐波理鏡・銅鏡30点はすべて破片で、
完形品がみられない〔奈文研2015・2016〕。

ちなみに、佐波理は、現代韓国語の「サバル（沙鉢）」
につながる言語の音訛とされる。新羅語？

上沢遺跡の性格、房王寺廃寺、井戸の祭祀の主催者

極めて貴重であった佐波理鏡を井戸の祭祀に使用した
上沢遺跡はどのような性格の遺跡であろうか。帶金具や
円面硯、祭祀に使う土馬、大型の柱掘形をもつ掘立柱建
物などが確認されており、一般集落ではなく官衙（役所）
の様相がみられるが、現在までの調査では郡家（ぐうけ）
の本体は未確認で、周辺施設かとされる。

ただ、地方の郡家の井戸の祭祀に佐波理鏡を使うことは
考えにくく、隣接する房王寺廃寺（凡河内寺）関連の
井戸ではないかと考えられる。

寺院であれば佐波理鏡を祭祀に使った類例がある。鞍
作（くらつくり）氏が造寺を主導した坂田寺（明日香村）
では基壇建物の地鎮具に使われている〔奈文研1986〕。

岐阜県各務原市の山田寺（さんでんじ）塔心礎の舍利孔
からは佐波理蓋鏡合子（ごうす）（重要文化財）が出土し
ている。出土状態は明らかでないが、舍利容器に使われ
たようだ〔京都博1988、他〕。

房王寺廃寺（室内遺跡）

会下山の西方一帯には、「塔の本・室ノ内・房王寺・堂ノ前・東大門」などの小字（こあざ）名が残り、瓦も出土していることから寺院の存在が推測されていた。新湊川掘削の際には礎石が出土したといわれ、室内小学校のプール建設時には多量の瓦が採集されたそうだ。

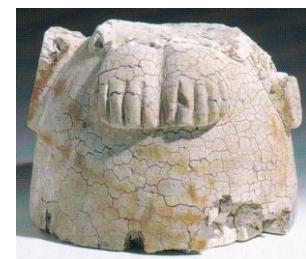
房王寺廃寺（室内遺跡）に関する調査は、新湊川河川災害復旧工事に先立ち行われた〔兵庫県1997・1998〕。新湊川は1901年（明治34年）に会下山に隧道（トンネル）を通し、（旧）湊川を西方の竜藻川と合流させた文字通り新しい川である。

調査地点は上沢遺跡の西北にあたり、室内小学校の真南、掘割状に東西に延びる新湊川の川底になる。

細長い調査区では瓦片が多く出土し、西側の落ち込み遺構から瓦当4点と塑像の台座（上図）が出土した。塑像は出土状況から奈良～平安時代前半のものとされる。

落ち込み遺構の西側には畝状の高まりが見られ、「この遺跡（寺域）の西端を示す可能性が高く」、「遺構群は河川を挟んで南北に展開すると考えられ」と指摘された。「室内小学校の運動場の地下にはまだ遺構・遺物が埋もれている可能性が高い」〔大脇2015〕。

出土瓦当↓



塑像の台座

佐波理鏡の入手先は？

佐波理鏡の入手先は不明だが、やはり知りたい。神戸地域の古代の状況から想像してみる。

■法隆寺が宇奈五岳の祭祀に使用

奈良時代、上沢・室内遺跡一帯は法隆寺の寺領だった。天平19年（747）に作成された法隆寺の財産目録でもある『法隆寺伽藍縁起并（ならびに）流記資材帳』には、26ヶ所の「山林・岳・嶋等」が列記されており（「山林岳嶋等 式拾陸地」）、そのうちの1ヶ所である（「摂津國雄伴郡宇治郷宇奈五岳 壱地」）。さらに四至が明示されており、東は彌奈刀川（みなとがわ）、北は伊米野（いめの）という今も残る地名が登場する（「東限彌奈刀川 南限加須加多池 西限凡河内寺山 北限伊米野」）。

彌奈刀川は（旧）湊川であり、伊米野は現在の夢野町が遺称地になる。県立兵庫高校の山手あたりが凡河内寺（おうしこうちじ）山で、山の麓に位置する房王寺廃寺は、「凡河内寺」と呼ばれていた可能性が高い。

凡河内寺は、大河内直（おうしこうちのあたい）氏が造寺を主導した寺と考えられている（凡と大は同意）。

しかし、法隆寺は多くの寺領を所有しているのに、なぜ、宇奈五岳のみ特別視したのか説明できない。そこで、

■天平勝宝四年（752）、新羅使節が献納し、



大河内直氏が祭祀に使った？

10世紀に編纂された律令施行細則である「延喜式（えんぎしき）」の玄蕃寮（げんぱりょう）諸蕃条には、新羅使に対し、敏壳（みぬめ）崎と難波で神酒と肴を給する儀礼を定めている。敏壳崎は、JR灘駅・阪神岩屋駅の南になり、今も式内・敏馬神社が鎮座する。神社は敏壳崎の先端に位置し、西には脇浜、東には深泥（みどろ）という地名が残る。敏馬は「萬葉集」にも多くの歌が収録されているように、泊・津であった。

敏壳崎での饗宴に使う神酒（みわ）は生田社（神戸市）で醸され、稻（酒米）は広田・生田・長田社と片岡社（大和国）の四社が負担した。広田（西宮市）・生田・長田社（房王寺廃寺の西隣）は今も馴染みの神社である。

新羅使の往来がもっとも頻繁であったのは高句麗滅亡（668年）から持統天皇没（696年）の29年間で、新羅使は25回とほぼ毎年、遣新羅使は9回記録に残る。新羅と唐の関係が緊張した時期である。

700余人の大使節団

ところで、天平勝宝四年（752）の新羅使は、例をみない大規模なもので、「700余人、船七艘に乗りて来泊」〔注〕と大宰府から、おそらく駿馬（はゆま）により、山陽道を大急ぎで駆けて報告されたであろう。

この大使節団を敏壳崎で接待したかどうか、『続日本紀』に記載はないが、古代の外交は前例踏襲が基本である。恒例に則り敏壳崎で接待したとすれば、通常の10倍にもなる規模の饗宴に四社の負担は莫大になる。

神の酒と肴で接待された新羅王子・金泰簾一行が、「ご馳走さまでした」とそのまま返礼もせず難波津へ行くような儀礼に悖るようなことはあり得ない。で、「カミサマによろしく」と、豪勢に佐波理鏡を接待使（大河内直氏？）に渡したのではないか。そのうちの一品が井戸の祭祀に使用されたので、後世に残ったのではないかと想像している。

外交に従事した大河内直氏の拠点

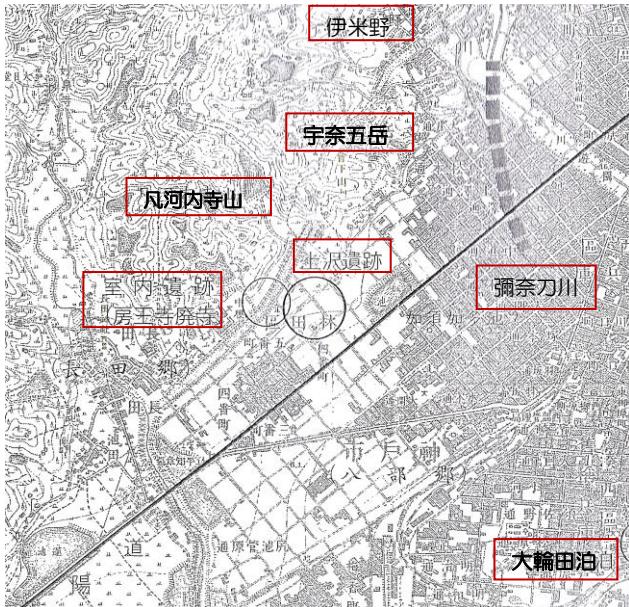
大河内直氏は外交・水運に関わった河内・摂津の有力氏族とされ、大河内直氏の最も重要な拠点に創建されたのが凡河内寺（房王寺廃寺）であろう。

大河内直氏が重要な外交使節に関わった例としては、推古天皇16年（608）、隋の裴世清（はいせいせい）が来日した際、大河内直糠手が掌客（まろうどのつかさ）という接待係を難波津でしている。舒明天皇4年（632）には唐の使者の高表仁一行を難波館に迎える導者（みちびき）として大河内直矢伏がみられる。隋・唐からの使者は倭国にとって別格である。接待役は漢音（古代中国語）を解したのではないかと推測される。

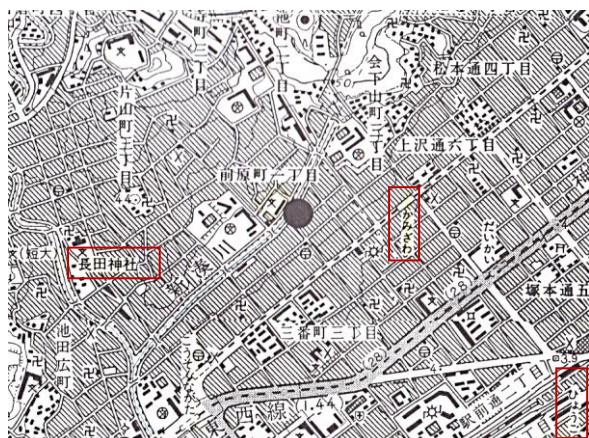
この大河内直氏の拠点が西摂にあり、敏壳崎での破格の新羅使節の対応にも大河内直氏があつたのではないか？ 新羅王子もむろん漢音を解したであろう。

長田社は房王寺廃寺の西隣に位置しており、凡河内寺は長田社の神宮寺（神社の運営を実質的に担った寺）のような性格ももっていたのではないかだろうか。

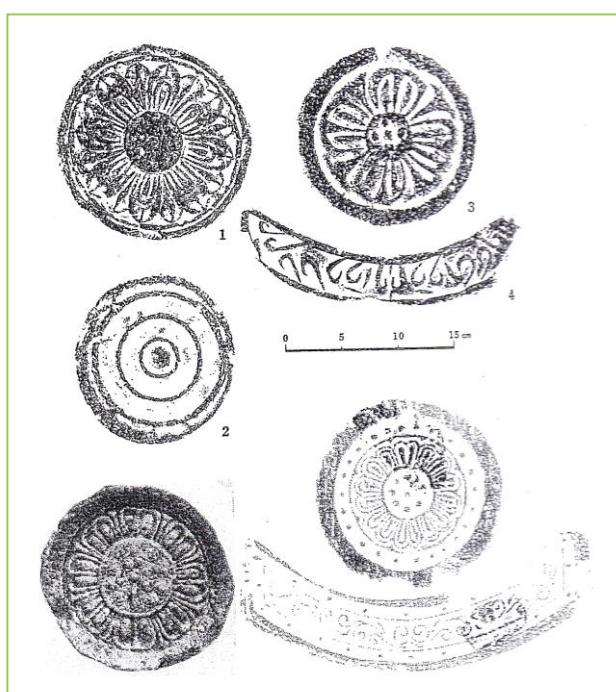
房王寺廃寺の瓦については、芦屋廃寺の紹介の際に触れているので、参照して下さい。



山陽道 凡河内寺山 房王寺廃寺 宇奈五岳 大輪田泊



室内遺跡（房王寺廃寺）の位置 [兵庫県1998] より



房王寺廃寺の瓦 [菱田2016] より

〔注〕

『続日本紀』天平勝宝四年（752）三月条
「大宰府奏す。新羅の王子韓阿浪（かんあさん）金泰簾、朝貢使大使・金暄、送王子使・金弼言ら七百余入、船七艘に乗りて来泊す、と。」

平城京には「使下三百七十余人」が入京している。

加須加多池は古代山陽道を堤防代わりに使った池かと推測されている（左図の皿池）。古代道路は直線道なので、低地や谷を遮断して通過すれば池の造成が容易であったであろう、賀古駅家（かこのうまや）（加古川市）にも隣接して駅池（うまがやいけ・まやいけ）が現在も残る。

■引用・参考文献

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1986

「坂田寺第5次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16

京都国立博物館1988

『畿内と東国一埋もれた律令国家—』

奈良文化財研究所 2015 「藤原宮・京出土の佐波理鉢」

奈良文化財研究所 2016 「平城宮・京出土の銅容器」

『奈文研紀要』

* 坂田寺出土銅鉢の成分分析がされている

8世紀末以降の地鎮具とみられる

兵庫県教育委員会 1997 「室内遺跡」

『ひょうごの遺跡』27

兵庫県教育委員会 1998 「室内遺跡」『平成9年度 年報』

神戸市教育委員会 2000 「上沢遺跡 第16次調査」

『神戸市埋蔵文化財年報 平成9年度』

神戸市教育委員会 2001 「上沢遺跡 第28次調査」

『神戸市埋蔵文化財年報 平成10年度』

神戸市教育委員会 2002 「上沢遺跡 第33次調査」

『神戸市埋蔵文化財年報 平成11年度』

神戸市教育委員会 2001

『古代のメインロード 一山陽道沿線物語—』

神戸市教育委員会 2016 『発掘 古代のお役所』

＊＊＊

浅岡俊夫 2001 「韓國古墳副葬品の脚台打ち欠き祭祀」

『立命館大学考古学論集II』

浅岡俊夫 2002 「須恵器の口縁部・脚台部の打ち欠き儀礼」

『田辺昭三先生 古稀記念論文集』

東野治之 2002 「新羅交易と正倉院宝物」

『平成十四年 正倉院展目録』奈良国立博物館

坂江 涉 2011 「敏壳崎でおこなわれた外交儀礼—神酒と肴の共同飲食—」『神戸・阪神間の古代史』神戸新聞総合出版センター

寺岡 洋 2012 「菟藻川（新湊川）から須磨へ

—上沢遺跡・室内遺跡—」

『ひょうごの古代朝鮮文化』むくげの会

大脇 潔 2015 「瓦からみた西摂の古代寺院」

『地域研究 いたみ』44号

菱田哲郎 2016.11.12 講演資料（神戸市埋文）

「佐波理鉢（さなみりわん）からみた古代の神戸」